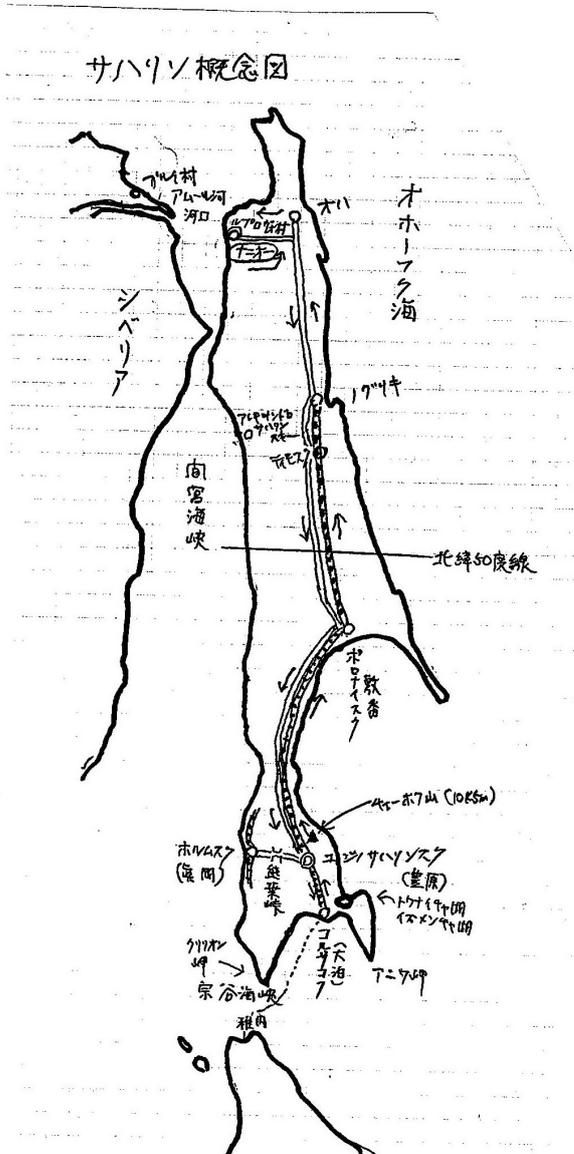


2014. 9. 7~17
戦中派サハリンに行く

～間宮林蔵、海峡存在確認、最北端到達記～

鎌田克則



↑間宮林蔵 (Wikipedia より出典)

問い合わせ先:

〒573-1143 大阪府枚方市宇山町 19-7

I] その背景

私は、小さい頃から冒険物語、探検物語が好きだった。特にロビンソン・クルーソー、リヴィングストン、間宮林蔵だ。特に間宮林蔵については、講談社の絵本で、林蔵が宗谷を出発するときのシーンを鮮明に覚えている。

そして高校山岳部時代、たまたま先輩に探検家が多く、その中でも梅棹忠夫さん、川喜田二郎さんとは白馬山麓で、2シーズン、各1週間スキーコーチを受け、夜は炬燵で、これまでのご自身の探検や、世界の探検家の話を聞いた。思いが深まるのは勿論、その後の人生に多大の影響を受けた。

それから幾星霜、2005年7月南アフリカのヴィクトリア滝近くのリヴィングストン記念館に立ち寄るツアーを見つけ参加、彼の海軍帽とコートに接し、涙した。

さて間宮林蔵の方は・・・2006年初め、雑誌「山と溪谷」で見開き両面ページに晴天下、青氷原を歩いている姿が大きく写り、その先に島影が見える。確か「間宮海峡アイスウォーク」と書かれていたと思う。右下に「ヒマラヤ観光提供」とあり、成程そんな手が有ったのかと、すぐさま電話入れたのは言うまでもない。

2006年3月ハバロフスク、ニコラエスク経由、アムール川河口の北43km、プレイ村の漁業組合の館をベースに、向かいのサハリンのルプロヴォ村の間宮林蔵の記念碑目掛けて氷原をスキーで挑戦、運悪く猛烈な低気圧に遭遇して、敗退の憂き目所か、脱出にも苦勞した。その折、今回ご一緒した日出平洋太郎さんと出会う事になる。

更に8年、その間色々情報を集め、特に2009年には稚内市が間宮林蔵200周年事業で「間宮林蔵の足跡を辿る」企画がされたのをNetで知り、その報告が手に入らないので、その企画をされた稚内市の北都観光の米田正博専務を訪ね状況を聞いたところ、西海岸側からのルートは、人家は無く非常に困難と聞いた。そしてその短編ビデオ等を頂いた。

そのうちにヒマラヤ観光の大島さんが、サハリン最北端の町オハ（オホーツク側）から記念碑迄行った人を見つけ、会ってみると、ロシア方面専門の旅行社の添乗員、長尾比呂美さんで、確かに記念碑迄行ったが、現地ガイドに付いて行っただけで、詳しくは覚えていないとの事、但し色々な参考資料を頂いた。いよいよ思いは高まる。

その後は日出平さんと相談しながら、オホーツク海側のオハの町から、西に横断して間宮モニュメントに行くルートしかないと考え、ヒマラヤ観光さんに、そのルートで、且つサハリン南北約1000kmを、片や鉄道で、片や車で走る。そして北緯50度線は必ず訪ねる事、それに今回は、間宮林蔵と同じく、船で宗谷からサハリンに渡る事を条件に、これまで間宮海峡、シベリア鉄道、カムチャッカで世話になったロシアの旅行会社を指定して企画を依頼した。

あれこれ情報が集まってくるものの、片やそんな物好きなプランに乗る人が居ない。2014年9月に実行と決めて日出平さんと参加者を探す。始めは6人ぐ

らい参加されそうだったが、最終は4人、それも全員75歳以上、男女2人ずつ、納まりの良い数だが、単価はその分高くなる。

参加者は日出平洋太郎さん76歳、品川容子さん75歳、加藤知左子さんは旅行中75歳（以上東京）、鎌田克則78歳（関西）。図らずも、みんな戦中派だ。やはり樺太に思いがあるか。

Ⅱ] 決行

2014年9月7日（日）私は伊丹より羽田経由で稚内に飛ぶ。東京勢は羽田で合流すべしが、わたしの乗る稚内便に団体が入って満員、3人は1便遅れる。私は空港から一人ハイブリッドバスに乗り、宗谷岬公園や、間宮林蔵立像、日本最北端の地を訪れる。



（宗谷岬の間宮林蔵立像）

何とかサハリンが見たい。今まで何度か見たが見えた事が無い。しかし今日は快晴、サハリンまで43km、見えない筈はない。バスの運転手に聞くと指を指してくれる。その方向に薄ら島の様にポコポコ見える。9月は良く見えるとの由。

稚内駅前で東京勢と会う。女性二人とは初対面、なかなかお元気なご婦人方だ。何たって誰も行かないサハリンに行こう、それも未知の間宮林蔵モニュメントに行く決心されるだけの方達だ。近くの民宿に荷物を預け、早速駅近くの飲み屋で壮行会。



（アインス宗谷 2628 トン）

9月8日（月）民宿の方に送って貰って稚内港、国際ターミナル8時到着。

その向こうに何やら見栄えは悪くないが寸足らずのフェリーが停泊、地方のフェリー乗り場と変わらないが、並んでみると何やら国際色豊か、何しろこの船で外国に行くのだ。空港から見れば手続きはドロ臭いものの、乗る

人々は気楽で慣れた感じ。どうも短期間往復者が多いようだ。それもその筈、3日ぐらいならビザが要らないのだ。



(稚内港の出国の様子)

乗船、9時出航。部屋は、新日本海フェリーの雑魚寝方式と一緒に混んでいるが、横になるには不自由しない。

先ず驚いたのは早速売店が賑わっているのだ。しかもそこにある商品は何と日本製ばかり。理由は簡単免税なのだ。サッポロビールが100円ナリ。

船名は「アインス宗谷」2628トン、15ノットぐらいで走る。サハリンまで43kmの距離なのに、9時に出港して、コルサコフに4時30分に着くと言う。7時間半も掛かる訳がない。何とその間に時差が2時間有るのだ。

それにサハリンの南部はご承知の通り、ハの字になっていて、西側(左側)大きなクリリオン岬(西能登呂岬)、東側(右側)はアニワ岬(中知床岬)で、宗谷から見ているのは一番南の長いクリリオン岬先端、そこまでが43kmだが、その岬から右奥のアニワ湾の底までの方が奥深く、目指すコルサコフ(大泊)までは何と159km、実質5時間半かかるのも当然。(写真御覧あれ)



(宗谷～サハリン航路地図)

ターミナルの傍らで自転車を畳んで袋に入れている2人の若者がいる。聞くと京都から来たと言う。何と我が立命の後輩ではないか。一人はOB、もう一人は現役との事、ビザの要らない短期滞在で、コルサコフ(大泊)ユジノサハリンスク(豊原)ホルムスク(真岡)を自転車で訪ねると言う。なかなか頼もしい二人だ。

実際2時間もすればクリリオン岬が見えて来るが、それからのほうが長い。

海はなぎ、予定通り4時半コルサコフ港に到着。

何やらさびれた港、それより入国手続きに時間が掛かると聞き一番に並ぶ。下船後これまた古びたバスで200m程移動、入国事務所へ。ロシア兵らしき人物がウロウロ、何となく緊張。

入国審査も大変。ビザ取得の関係が大層この上なし。4人共時間が掛かってやっと通過。出たところで預けた荷物をピックアップ。これでやっとこれからお世話になるガイドのオルガさん(40歳ぐらいの女性、聡明そう、後に真価発揮)とドライバーのエリック(韓国系、頼もしく、運転、心配りに感心)と出会う。



(コルサコフ(大泊)港)

挨拶もそこそこに荷物を積んでユジノサハリンスク(豊原)へ。途中北海道拓殖銀行、大泊支店の立派ながら廃墟化している建物がうら悲しい。

今夜はガガーリンホテル、帰りも泊まったが、これまでの3回ロシアの旅行では一番立派。やっとサハリンに来た思い。

9月9日(火) 今日にはアニワ岬(オホーツク側)の付け根の辺りの湖と昨日下船したコルサコフ(大泊)を見物するのだが、これには裏がある。

そもそも今回の計画は、全長984kmあるサハリン島の大半を片や列車で、片や車で往復する計画だが、どうしても片道の車を又800km近く戻らなければならぬ。それが悩みだったのだが、旅行社はエリックを1日前にトランク等の大型荷物を積んで、列車の終点まで先行させ、我々は手ぶら同然で今夜の夜行列車に乗り込む手筈なのだ。そのためには、今日は昼間一日別の車で観光しなければならず、それでコルサコフ周辺が選ばれた事になる。

私はそれを密かに喜んだ。即ち間宮林蔵は、1808年の第一回の探検では、近藤重蔵が西海岸を北上、林蔵はオホーツク側の東海岸を北上する事になる。それでは遠回りになるので、半月早目に出発、アニワ岬の付け根をショートカットしたのだ。当然トウナイチャ湖、イズメンチェボ湖辺りを通った筈であるが、実際には見当もつかなかった。

トウナイチャ湖ではおとりの鴨を沢山浮かして鴨を銃で撃ち落とす現場に遭遇、撃ち落とした鴨や銃を見せられてギョッ。イズメンチェボ湖では水泳場の脱衣施設が残っていて、サハリンの人も泳ぐと知る。

コルサコフは日本との航行上の入口なので、旧日本統治時代の施設がたくさん残るが、それも70年経ってわびしい限りだ。いくつか紹介すると、神社は立派な階段を残すのみだが、手洗いの水はまだ出ている、近所の人々が重宝しているとか、港の西側にサハリンIの液化天然ガス出積み出し港があるのだが、その横の海岸近くに「日露戦争役樺太大遠征上陸記念碑」と言う10メートル近くの大きな石柱が残骸と共に横倒しのままある。



(日露戦争樺太上陸記念碑)

日露戦争終盤の1905年7月、講和条件を有利にするため、ここから上陸、一月足らずでサハリン全島を占領したと言う。明治の初め榎本の武揚の千島樺太交換条約が、屈辱的だったとの思いもあるようだ。実際にはポーツマス条約のより北緯50度線まで後退させられた。しかし1918年、またもやロシア革命のどさくさに日本はシベリア出兵し、再度50度線を越えて北を占領して

いる。4年間居座ったが、世界から領土的野心を疑われ、且つロシアの抵抗に遭って1922年撤退している。

もう一言記させてもらえば、サハリンの主だった街には必ず立派なロシアの戦勝記念碑がある。ロシア全土でも同様だが、シベリア以西は革命戦争の記念碑が多いのに、サハリンでは日本軍との戦勝記念碑ばかり。その地には必ず日本人の慰霊碑も有る。驚くのは今でも戦勝記念碑に花束が飾られていることだ。

そもそも日ロ不戦条約を破って、敗戦確実の8月9日に、突如北緯50度線を越えて攻めて来て、1945年8月15日のポツダム宣言受諾後、即ち無条件降伏後も攻め続け、全島占領後の8月25日にやっと戦争が終わっている。その間無抵抗の市民がどれ程殺された事か。それを戦勝として立派な記念碑がたてられ、70年近く経っても花束が添えられている。全く我々にとって納得できないところだが、かつての日本軍の占領政策を考えれば、致し方ないと言うべきか。

それに加えて、コルサコフの丘に二つの尖塔が有り、先端が西南に曲がって居り、韓国に向かっているように見える。望郷の碑と聞いた。

戦前日本は植民地の韓国人を、出稼ぎや徴用で大勢の人を移住させた。しかし敗戦により、日本人は帰還出来たが、韓国人は迎えの船もなく、実質置き去りにされた。このことは当時の国際情勢も絡み、色々あるようだが、少なくとも2万7千人ぐらいの人が、故国に帰れなかった。その望郷の思いが碑になっているとの由、これも胸が痛む話だ。



(韓国人達の望郷の碑)

所が明るい記念碑もある。湖の辺りをウロウロしているとき、オルガが白瀬中尉の記念碑があると言う。まさかと思って近くの落帆村（アイヌ部落）を訪ねると、その一角に、一辺が2メートル程の立派な鉄網上の囲いが有り、その中にステンレスの銘板に、何と白瀬探検隊に加わった樺太犬はこの地で調達され、それと共に二人のアイヌ人が同行した事を顕彰する碑であった。



（白瀬探検隊参加アイヌ人と樺太犬の顕彰碑）

村だったのだろう。

私は白瀬中尉が南極探検に60頭の樺太犬を使用したことについて卓見と評価しているが、それは梅棹さんから、アムンゼンは犬を使用して南極到達に成功し、スコットは馬を使用して失敗した。それで自分も樺太へ行って犬橇の訓練をしたと、その体験談を詳しく聞いていたからだ。多分この

村だったのだろう。

それよりも実際の白瀬探検隊が運んだ樺太犬は、航海中に暑さと疫病で大半、死亡、ニュージーランドで再度補充、その際二人のアイヌ人が同行する。しかし南極ではあまり活躍した話は聞かないが、白瀬が南緯80度5分に達し、帰る時、何とか6頭だけ船に乗せられたが、20頭ほどはどうにもならず置き去りにした。帰郷したアイヌ人二人は、犬を大事にするアイヌの村民から不遇な扱いを受けたらしく、白瀬中尉はそれを非常に気にしていた様だ。これがこの記念碑に繋がったと思う。白瀬探検隊100周年にこの碑が建てられたとか。

さてユジノサハリンスクへ戻り、今夜はサハリン唯一の、北方行き列車、それも旧日本が敷設した線路で、最北端のノグリキ（50度線以北）迄の夜行寝台列車に乗るのだ。

何しろ日本時代からの列車だから、メンテナンスがしっかりしているか不安を抱きながら先ず駅へ。ロシアの駅にして割に新しく、しっかり管理されている様子。

時刻表示版の時刻表示が解らない。何とモスクワ時間で表示され、ここではマイナス7時間。ロシアならではの話。

それに列車を撮影しようとしたらこれもダメ。特にこの駅は厳しいとの事。

そこでシベリア鉄道を思い出した。始め厳しそうだが、何日か経つてくると、車掌と仲良くなる。その最たるものは、日出平さんがウオッカを飲み過ぎて、何と女車掌に抱き着いた。その顔をそむける所を私がパチリ。後でそれ程嫌そうな顔でなかったと我々仲間での専らの評判。そんなものだ。



(ユジノサハリンスク駅の様子)

んだら、シベリア鉄道と違って、とても床下に入らない。ドライバー・エリック

列車に乗り込む。意外に整備清潔、日本の寝台車と変わらない。

唯2階への登り降りには歩幅と技術が要る。コンパートメントになって居り、4人には納まりがよい。シベリア鉄道と決定的に違うのは線路が狭軌である事だ。要は全てにおいて狭い。大きなロシア人なら弱ることだろう。そこに大きなトランクを持ち込

クが朝から先行してトランクを車に乗せて運んでくれた配慮に感謝、感謝。

オルガは近くの部屋のベッドを確保し色々アドバイスしてくれる。夜行なので食堂車は無い。保線も北海道鉄道より良さそう。乗り心地よし。ウオッカを少し嗜んで心地よく眠る。



(寝台列車の様子 (コンパートメント))

9月10日(水) 朝、メンバーの下車の準備の音で慌てて起きる。8時ノグリキ到着。



(ノグリキ駅到着風景)

割に正確。下車し早速列車撮影。しかしみんな急いで降りるし、長い列車で先頭車迄行けぬ。

駅前にはエリックがにっこり、車(トヨタハイエース・レグナス)と共に待っている。やあやあと挨拶を交わし乗り込む。近くで朝食。早速市内見学。ノグリキはサハリン全長984kmの内、4分の3程の北のオホーツク側の街である。

ロシア教会、戦勝記念碑、片や必ず日本人慰霊碑もある定番コース。その中で一寸したサプライズがあった。

ノグリキ歴史博物館（北方民族博物館）を訪れる。細々たる展示品を見ていると10人ぐらいのおばさん方が集まっている。顔を見ると明らかにいろんな民族と思われる方たちだ。聞いてみるとニブヒ、アイヌ、ウイльта・・・それにロシア人とハーフ、韓国系 e t c。要はニブヒ族歌舞団の人達。

その人たちが歌を歌い、楽器を演奏し、踊ってくれると言うのだ。余程日本人が珍しいのかとも思ったが、どうも旅行社がセットしたようだ。それぞれ歌、楽器演奏、踊りを鑑賞させて頂いたが、現地の歌や楽器、踊りを鑑賞出来て有益だった。

その後エリックが大きなケーキを持ってきた。これもセットの内らしい。別室でケーキとお茶で懇談となる。お互いに珍しいので何でも聞く。



(ニブヒ族歌舞団の人達との懇談風景)

ア本土に遊びに行けるとか。唯実際にはなかなか行かないようだ。魚の骨の干物が出てきて、それを噛みながら和やかな話合いは続いた。



(砂塵道路を一路北へ)

やはり段々と生活の話から年金の話になる。どこの国も最大の関心事だ。ロシアにも年金がある。勿論我々よりはるかに少額だが、生活程度と比較せねばならぬ。片や生活のためにパートに出る人が多い。これが終わったら行くと言う人も居た。特に面白かったのは、ロシアは一年に一回航空券をくれるそうだ。あのプーチンもやはり人気取サービスをするのだ。それでロシ

さてこれからサハリン最北部のオハの町まで走る。約230 k m。其のオハはサハリンⅠ、サハリンⅡの石油、天然ガス産出で賑わっている筈であり、当然道路は舗装されていると思った。

以前訪れた中国のタクラマカン砂漠では、同じく石油や天然ガスが出るため、何と砂漠の

ど真ん中に、1000 k mの完全

舗装の縦断舗装道路が敷設されており、快適に走った事がある。

所がこちらは全くの砂塵ロード。エリックに聞くと、サハリン南北全長の内、舗装されているのは、ポロナISK以南の5分の2程度で、北の5分の3は未舗装なのだ。ロシアの辺境開発はそんなものなのだ。パイプラインは最南端まで敷設され、日本にも輸出されているのに。

何しろ何もない平原（何千mの氷河で押しつぶされて平原になった由）だから、道幅は広いが、全くの砂塵道路。遠くから砂塵を巻き上げて来る対向車とすれ違ふと、前が見えないどころか、口を押さえたいくなる。しかしトヨタレグナスは平気、全く車内には全く影響が無い。

時折休みながら、只ひたすら北へ。うんざりしたころ、夕刻のオハに着く。市内を回りホテルを探す。オルガは冬に一度来たことが有ると言いながら探すが見つからず。遂に歩いて探しに行った。その間市内の戦争記念碑の辺りで待つ。元気な悪ガキどもが遊んでいる。全く元気で素直だ。なんと逆で我々にアメをくれたのである。

やっとオルガがホテルを見つける。何と団地の端の一部で小さなネオンが付いているだけ。要は団地のそのもの。そのうち3部屋分だけが5階までホテルになっている。我々には5階の3DKの部屋を二人で使う。広いのだが、EVなし。5階まで荷物を担ぐ。夕食も外食。

9月11日（木） 今日はこの計画の最大目的、間宮林蔵のサハリン最北端到達地点、ルポロヴォ村（旧ナニオー）に向かうのである。

さてこのルポロヴォ村はその存在すら怪しいのだ。オルガの話では、今年の春頃にこの計画の添乗のオファーが有った時、エリックと共に非常喜んだとか。彼等にとって、このようなオファーは一度もなく、殆どは南部で、それも日本から来るお坊さんや慰問団の案内、短期のユジノサハリンスク周辺の観光案内ばかりだそうだ。勿論ルポロヴォ村なんて聞いたこともなく、オハの市役所に電話で問い合わせても、何も解らなかつたとの由。それで色々調べ、問い合わせ

てやっと、昔ルポロヴォ村に行ったことがあると言う運転手を見つけ、それに大型6輪のオフロード車を手配したのだそうだ。

さてその車、とても団地に入れないので外で待つ。我々はそれを見て歓声を上げた。何しろ大きくて、高くて強そうなのだ。それに力以上の轟音。言うなれば大型ダンプトラックの荷台が箱になって居り10人ぐらいの座席があるという代物。

9時出発。乗り心地はこれで



(強力オフロード六輪車の威容)

スプリングが付いているのかと疑うほど。それが物凄い轟音を上げて疾走するのだ。それに前が見えないから、予測なくショックが来る。運転台との連絡は、単にブザーだけ。一度押すとGO、2度押すとSTOP。

昨日の道を小一時間戻り、それから直角に曲がってひたすら西へ向かう。道を知っているのはドライバーだけ。目的地まで4時間で着くと言う。我々は揺すられながら目的地に着く事を祈るのみ。そのドライバー、なかなか陽気なアンチャン。

1時間半ほど走ってたまらなくなつて2度のブザーを押す。突如道の真ん中に止まる。対向車はない。その周辺で休む。その時私が言った。「運転台に乗せてくれないか」

陽気なアンチャン快諾。先ず私が真ん中。日出平さんが右端。何しろ運転台に登るのに、足掛けより30cm下に太い鋼鉄線の輪が掛っており、それに足を掛けても、運転台の取っ手に届かない程高いのだ。登ってみれば展望この上なし。それにショックも事前にわかり足をふんばる事が出来る。その後は休むごとに交代、好評である。

ブルドーザーでかき回しただけの道だが、しょっちゅう分岐し、ドライバーは躊躇なく選択して行く。周りは灌木帯の平原ばかり。時折川を渡るが、オフロード車の威力で突破。片やドライバーは運転よりも、ラジオの音楽の選曲に夢中なのだ。時折音楽に感動したような大声を上げる。「バンザイ!!」。こんな所に日本語が残っているのだ。こうなれば唯ひたすら彼に機嫌よく走って貰うしかない。

4時間も過ぎ、5時間になろうとする頃、日出平さんが道路の土が砂に代わってきたと言う。成程海岸近らしい。たまたま対向車が止まっていて、ドライバーが道を聞きに行く。解ったのか、解らなかったのか、また少し進むとT字路に突き当たる。さびれた人家有り、またもやドライバーが人家に聞きに行く。その時運転台に居た私は、2~300m先の丘に、道標の様なものを見つけた。

「あれだー!!」。ネットで見たモニュメントなのだ。早速降りて皆と草原を直進してモニュメントに向かう。途中で道が現れ、10分ほどで到着。正しく間

宮林蔵顕彰会の人が建てたモニュメント。石板に書かれた文字が読めないとの話もあったが、ほぼ読める。とくと写真をご覧あれ。

その向こうは正しく海。間宮林蔵が北へ向かって開けているのを見て、サハリンが島であり、シベリアとは繋がっていないと確信した事を改めて思わせる。



(間宮林蔵モニュメント)

それが当時としては、ここが航海可能地域での世界最大の白地図地帯であり、そのことを百も承知で間宮林蔵は命を懸けてそれを確認し、シーボルトがそれをヨーロッパに伝え、世界地図に「MAMIYANOSETO」と書かせたのである。正しくここが偉業の原点なのだ。



(間宮海峡確認した海の風景 (パノラマ))



(間宮林蔵モニュメント前の参加者全員
一番左はオルガ)

んでいるのだ。これが我々の求めたルポロヴォ村なのか。よくまあこんなところ



(ルポロヴォ村 (旧ナニヲ) の住人と犬)

ん一行が来たことも解る。そして平成8年(1996年)間宮林蔵8代目と顕彰会の一行が、ロシアの船をチャーターして、間宮海峡を通過、サンタン船を持ってきたことも解っている。この時この記念碑を建てたのだろう。

アムール川の河口は判別できなかった。しかし向かいには8年前氷原を渡ろうとした起点のプレイ村であろう。

記念撮影するやら、記念碑にウオッカを掛けるやらの後、弁当を開く。

記念碑に向かう頃から1匹の黒い犬が一言も吠えずについてきて、みんなの弁当のソーセージ等独占。誰かが「この犬、今までこんな美味しいものを食べた事が無いのではないか」と言う。確かに丘から見渡せば数軒の廃屋同然の家が見える。住んでいるのか

どうか、とても見当がつかない。しかしこの犬は明らかに飼い犬である。すると人が住

所が、車に戻ると三人のおじいさんが集まっている。犬も数匹集まって来た。

オルガの通訳によると、時折人が来ると言う。この夏か、昨年の夏か2人来たらしい。但しどうやって来たのであろうか。一つはシベリアから二人モータボートでやってきたことはネットで知っている。それに大阪の長尾さ

それ以外ではヒマラヤ観光の間宮海峡アイスウォークで何人か訪ねた人が居る。どちらにしても、エベレスト登頂者よりも一桁以上少ないのではないか。我々は案内ドライバー、オフロード車、道も橋も支障なく通過、みんな元気で、天候にも恵まれて着いた。どれ一つ欠けても達せられなかった。最後は運が付いていたとしか言いようがない。但し間宮林蔵に言わせれば、鼻にもかけない話だろう。

さて帰りは順調、それでも4時間かかった。行き5時間、帰り4時間、合計9時間、サハリン島がこれほど幅が有るとは信じられなかった。そのハードなドライブながら、満足感一杯だった。

9月12日(金) 今日是一路南へ。これから3日間掛けてサハリン南端迄約800km走るのである。その第1日目はティモスク(北から3分の1)まで、概ね300kmぐらいか。まずオハの町、オホーツク海岸、郷土博物館、それに沢山の石油掘削機等々見物、さすが石油の町だ。オドロキは海岸で、もう少し現在地が解ればと言ったら、エリックがスマホのGPSで簡単に見せてくれた。実に明解。これなら、ルポロヴォ村の正確な緯度経度等が把握出来たのだ。それと郷土博物館では、案内嬢が、わざわざ日本人墓地を案内し、お爺さんの名の有る所を見せてくれた。彼女も幾分か日本人の血が流れている様だ。

後は一路南へ。濛々たる砂塵道路をひた走り。途中ノグリキ駅、ティモスク駅で改めて鉄道、列車の写真を撮る。列車、線路、駅等は他のインフラ、例えば道路の舗装なんかには比べれば、メンテナンスは行き届いている様子。とはいながら、突如子牛が走り込む。

ティモスク周辺はソ連時代コルホーズが有って、流刑者を多数送り込んだとか。それを言えば、この東のアレキサンドロフ・サハリンスキーには、ロシア帝政時代、思想犯を含む大勢の流刑者を送り込み、チェーホフが3ヶ月も滞在し、調べ、「サハリン紀行」を著し、その非道さを訴えた事を思い出す。さらにもう一言申せば、ロシアと言う国は、人を抑留する、移住させる事を何とも思わない国だ。日出平さんは、先ず周辺諸国に国民を移住させ、だんだんと浸食して行く国だと言う。事実サハリンも千島もロシア人はいなかった。クリミアも、東ウクライナも同じ手法か。要はロシアとプーチンは未だに領土拡張意欲満々なのだ。所が面白い事に、インテリのオルガは大のプーチンファンなのだ。メドベージェフはダメ。

ティモスクは田舎町で、多分ホテルは一軒、レストランの上の3~4階に泊まる。シャワーが複雑で弱った。

9月13日(土) 今日ポロナイスク(敷香)迄(北から半分ぐらい)、約210km。途中北緯50度線を越える筈。

途中日本人住宅街(住んで居られるか不明)、駅等寄りつつ、相変わらずの砂塵道路を一路南下。

エリックがアッと声を出し、おもむろにバック。何と北緯 50 度線なのだ。確かに高い標柱が立っている。要は北緯 50 度線が道路を横切っている。



(北緯 50 度線記念標柱前)

南北 1 k m 程緩衝地帯が有るように聞いていたけれど、疎林が 10 m 程透けている程度で、その下に小道がある。西に辿って行くと、幅 1 m、奥行き 70 c m 程の古びた礎石の土台がある。明らかに国境を示す標柱が有ったことを示している。事実その上部はユジノサハリンスクの郷土博物館にあ

った。

何となく境界を示す様子が残っているが、所詮唯の小道。その先は草藪。

こんな人為的なラインを跨いで日ソが敵対し、幾多の命が失われたのだ。「強者どもが夢の跡」なんて悠長な世界ではない。



(北緯 50 度線即南の日本軍の塹壕跡)

すぐ南の川の対岸には幾つもの銃眼を備えた堅固なトーチカが残っているし、後方には作戦本部、弾薬庫もある。

オルガから聞いた話や、調べた事を総合すると、ソ連はヤルタ会談の秘密協定に基き、日ソ不戦条約を破棄、1945 年 8 月 9 日、日本に宣戦布告。事前に周到な準備の上、50 度線を越えて攻撃、半田、幌見峠辺りで激戦、

日本軍も相当抵抗した模様。しかし戦力不足の日本軍は敗退一途。8 月 15 日のポツダム宣言受諾は双方知りながら、ソ連は白旗掲げる日本軍に攻撃、日本側も応戦せざるを得ず、艦砲射撃、空爆を含む攻撃により、全島完全占領の 8 月 25 日迄それが続いたのだ。その間多くの日本の軍人、民間人の命が奪われた事は言うまでもない。

よってその周りには、日本人の立派な慰霊碑が有る。それが如何に立派とて、この理不尽な話が癒される訳もなし。突き詰めていくと、戦争自体が理不尽なのだ。戦争とは結局人を殺す事だと理解すれば、これからは如何に戦争を避けるかを考えるしかない。

さてそこから更に南下し、ポロナイスクに入ると俄然日本色が強くなる。先ずは馬鹿でかい王子製紙の工場。廃墟ながら、ボイラーだけは今も給湯に使っているらしい。



(ポロナイスクの王子製紙工場跡)

それに大鵬の石像もある。周辺は小さな公園になっていて、その正面に石像が有るのだが、等身大と思いきや、大きさは我々とあまり変わらなかった。石板によれば大鵬(本名 納谷幸喜)はここに生まれ、幼年期を過ごしたらしい。32回優勝し、天皇賜杯を受け、死後国民栄誉賞も授与された由。

その夜は昨夜よりましなセーベルホテルに泊まる。

9月14日(日)今日はユジノサハリンスクまで270km。さすがにここからは舗装されている。途中マカロフ(知取町)で日本人墓地、立派な神社跡、小学校跡を訪ねる。やはり本州でも日本海側より太平洋側の方が気候が良いように、やはり人家はオホーツク海側に人家が偏るようだ。



(大鵬の石像)

それらを見るに、その地を必死で開拓し、骨を埋める。ひたすら子孫の繁栄を祈る。その本気度がひしひし伝わって来る。神社の立派な鳥居の石柱に「皇紀2600年記念」と刻まれている。その頃は希望に燃えて、村民一丸となって建てたのであろう。その人達、その子孫の人達は如何されて居るのだろう。こんな姿で残るとは夢にも思われなかったに違いない。

列車と並行するので、駅前を通過する



(日本人村の鳥居の柱)

が、駅前屋台にはガンコーラの実（ベリー）や大きなタラバ蟹が売られている。

アルセンチカフ辺りがサハリン島で一番幅が狭く、横断道路もある。間宮林蔵は初め東海岸を北上するが、ポロナイスク・テルベニア岬で、それ以北はとても海が荒れ、小さい船では無理と判断し、戻ってこの辺りで、船ごと西海岸に越えている。ここが狭い事は現地のアイヌなら知っていたと思うが、船ごと山越えするなんて、何処を越えたのだろうか。

横断道路辺りでの山の様子は、丁度京都の東山ぐらいで、とても越えられぬ。少し南下するうちに、細い川が2本あり、山手を見ると低い。林蔵はこの辺りから、横断したのだと一人確信する。

スタロドゥブスコエ(栄浜)の海岸では琥珀を探すことになっている。行って見ると何でもない海岸の打ち寄せたゴミの中に琥珀が有るのだ。とても真剣に探す気になれない。所がオルガは真剣に探す。私が小さな欠けらを一つ見つかるうちに、結構10個ぐらい拾うのだ。大きいので8mm位、強欲な私は皆さんの拾った分を全部頂いた。そして家の山の神に捧げた。しかし未だにビニールの小さな袋に入ったまま、食卓の上にある。

快走してユジノサハリンスクへ。時間があるので周辺を見物。まず又王子製紙落合工場跡、その大きさもさることながら、その煙突の高さにびっくり。それに野良犬が沢山居る。地元では「王子製紙の犬」と呼ぶそうだ。

それと場所は忘れたが、昔懐かし奉安殿が残っていた。多分小学校の一角なのだろう。ユジノサハリンスクの郷土博物館にもこれまた別格扱いで残っていた。

所で皆さん奉安殿をご存じだろうか。ご存じの人は戦時中に国民学校に通っていた人だ。要は小学校の運動場の片隅に必ず立派で小さな建物が有って、その中に教育勅語が納められている。紀元節とか、天皇誕生日には、校長が恭しく出して来て、講堂で読み上げる。こちらも頭を垂れて、内容は全く解らないのだがそれを聞く。それに訳が分からなくともそれを暗誦させられた。私でも初めの方は今でも言える。今回のメンバーは、みんなその体験者。それに大抵奉安殿の側には二宮尊徳の薪を背負い、本を読んでいる銅像が有ったものだ。

さて市内正面の旭ヶ丘にロープウェイで登る。その下はスキー場でもある。京都で言えば大文字山に登るようなものだ。市内全域が見渡せる。それに明日登るチェーホフ山(1045m)が望めるか期待したが見えず。その他チェーホフ像やロシア正教会等見物。



夜はガガーリンホテルでの食事。オルガの家はホテルの近くらしくて、彼女は家に帰って集合時間にはドレスアップしてやってきた。これまで条件の悪い環境でも彼女の気遣いに感心していたが、ここに至ってホレボレ。

やっと主たる目的を消化し

てなごやかな会話。そんな中で東京の空き巣の話が出た。その時オルガが真面目な顔して、東京にドロボーが居るのかと聞いた。彼女は、旅の道中の会話で、何回か東京にも、モスクワにも行っている様子。第一彼女の夫は警官だし、長男はモスクワ大学に入ったとか、長女もそれなり、家族の写真をちらっと見せてくれたが、アメリカの家庭の様に見えた。彼女も好きで日本語の勉強をしているだけ、夫も何か語学をやっている模様。そんな彼女の質問に絶句。要は日本はそれほど安全で平和な国と思われているらしい。

翌日はチェーフ山に登る。彼女も登ると言うので早い目に散会。

9月15日(月)今日はチェーフ山(1045m)に登る日である。天候は良い。ホテルのロビーには、今日のガイドのワシリさんが来る。元気そうで、話好き。日本語上手な50歳ぐらいの気の良いオジサン。要はチェーフ山は(多分我々が外国人だから)ガイドが付かないと登れないのだ。8時頃エリックがオルガをピックアップしてやってくる。山麓までホテルから東へ20km程だが、市街を抜けると道が悪い。何とか40分ほどで山麓到着。登山道は良さそう。案内板も要所、要所にある。出発地の標高は300m弱ぐらいか。緩急あるが総じて登り易



(チェーフ山中腹より頂上を望む)

い。ワシリさんは植物に詳しい。花に詳しい品川さんの質問にも即座に答える。樹林帯ではあるが、緯度が高いので間もなく透けて来る。チェーフ山は50度以南、即ち旧日本領では最高峰。日本名は鈴谷岳、スズヤとはアイヌ語で柳を指し、谷では柳が多いとか。サハリン全土では北に1600mを超える最高峰があるが、鈴谷岳は、旧日本領時代には日本人に好まれた様

だ。先を考えてゆっくりと登る。標高600m辺りで開けて来て展望良し。その頃から若者男女がバラバラ登ってくる。何と石油大学の学生とか。男女共屈託なく、且つはつらつとしている。うらやましい。頂上方向が見えて来るが、遠くて山容は大きい。先ず一つ目のピーク。頂上に岩峰が有るが、その直下を左にトラバース。



(チェーフ山 1045m頂上。右端はワシリさん)

元気な日出平さんと加藤さんは岩峰を登る。

それから緩い登りを登ると第2のピーク、その先に頂上と思われるピークが見えるが、なかなか遠い。休み休み進む。頂上に祠のような建物が見える。ワシリさんはしゃべりづめ。気が良いのか、日本語をしゃべりたいのか。聞きながら歩いて居れば何とか頂上へ。3時間ぐらいの予定が、山容が大きいので4時間、登り応えのある良い山だ。一寸日本の山で探せば比良山の武奈ヶ岳か。頂上にはコンクリート造りの、潰れかかった、人がかがめば入りそうな祠の様な建物？が有る。用途は見当もつかない。日本時代の建物だろう。片や三角点がありそうな場所に穴が開いている。当然1等三角点だろう。引っこ抜いた跡あり。その行き先は翌日出会う事になる。

何しろ展望が良い。オホーツク側も見えれば周囲の山々も良く見える。360度オープンなのだ。人気があるのは当然だ。

下山も同じルート。見当がついているので、下りは3時間。麓でエリックが待っていた。帰り王子公園を訪ねる。遊園地だ。短い秋を楽しんでいるのだろう。平和な風景。ワシリさんともお別れ。

後で聞いた話だが、オルガは我々が頂上まで登るとは思っていなかったらしい。老いたりと言えど、見くびって貰っては困る。何たって我々は戦中派なのだ。

9月16日(火)今日はホルムスク(真岡)を訪ねる日。午後はユジノサハリンスクに戻って観光の予定。

今日は流石に雨模様。真岡までは85km。快調に走る。真岡は間宮海峡側の、即ち西海岸における最大の貿易港且つ漁港である。時たま日本の小樽港と連絡船がある。よってオホーツク側のユジノサハリンスクから行けば、背稜を越える



(熊笹峠の日本軍トーチカ)

るので、当然に峠が有る。それが熊笹峠。その名の通り熊笹に覆われている。その峠には一段立派なロシアの戦勝記念碑がある。高い塔の上にこれ又大砲が乗せられ、真岡側に向いている。片やその側には日本軍のトーチカも残っている。当然激戦の地だ。

峠を下るとホルムスクの市街、海岸線を南側から北え向かって見物を始める。また王子製紙の工場跡、それに海岸の公園には立派な銅像。聞け

ば漁師の銅像とか。一方突堤には沢山の釣り人が糸を垂れている。どこでも見られる風景。鉄道の線路や駅がある。西海岸を北上するようだ。片や神社の階段、大勢の慰霊碑、そして雨交じりの中、本日の最大の目的地に着く。

真岡郵便局。「地球の歩き方」の解説によれば、・・・1945年8月20日、真岡に侵攻したソ連軍との戦争のさなか、真岡郵便局の若き電話交換手9名が、最後まで任務を全うし、青酸カリによる集団自決を遂げるので



(建て直した真岡郵便局)

ある。若くして逝った女性たちの最後の言葉は、「みなさん、これが最後です。さようなら、さようなら」であったと。・・・このことは事前に詳しく調べて来たが、とても書けないので詳しくは、ネットで真岡郵便局事件を検索されたい。要は「北のひめゆり」と言われる。

現地は建て替えられていて、郵便局と銀行になっていると聞いたが、その通り、後ろに高いマンションがあり、その一階部分と思われる。もう少し海岸から離れていると想像していたが、海岸から1~200mぐらい、海岸道路で西向き、海に面している。

オルガの話では、当日は夏にも拘わらず霧が立ち込め、海岸から艦砲射撃するソ連軍、対戦する日本軍、霧の中であちこちから火を噴き、大砲、爆弾、銃弾の応酬、住民は右往左往するうちに倒れて行ったと言う。これだけ海岸に近く、それも軍艦から砲撃を受ければ、とても生きて脱出する事は考えられない。万一生き伸びたとしても、その末も考えたに違いない。我々にはそれが痛いほど解る。

恐る恐る郵便局のドアを押す。入ってみると、確かに奥に郵便の事務をやっているデスクが見えるが、お土産、お菓子をところ狭しと並んでいる。要は郵便とお土産、菓子販売と併業しているのである。



(建て直した真岡郵便局内風景)

まあ現実とはこんなものか。一方峠のあの立派な戦勝記念碑は、無抵抗な住民等に無差別な戦いの勝利を誇っているのか、これも現実。今の若い人はこれを見たら何と思うだろうか。

後は峠に戻ってユジノサハリンスクへ。市場で買い物、

何たって海産物が豊富。持って帰れるだろうか。オルガに聞くが、持って帰った人は多いが、その先は知らないと言う。えい！持って帰ろう。麻薬じゃない。



(ユジノサハリンスク郷土博物館)

みんな思い思いに購入。トランクの中に入れた。念のため結果はセーフ。但し出国時、大きな犬が居て、一瞬凍りついた。

さてサハリン州立郷土博物館。実に立派。丁度修復後間もなくだったようだ。もともと豊原時代の象徴的建物。始めから樺太博物館として有名な建築家の設計で建てられたとか。その頃の日本の気概が解ると言うものだ。

まず前庭からして立派。噴水もあり、結婚式場に使われている。その前庭の廻りに、茶室、奉安殿、大砲、墓石、三角点、戦車 E t c が置かれている。

まず前庭からして立派。噴水

これも博物なのか。墓石や三角点は、そもそもその用途を理解しているとは思えない。要は珍しいものは何でも残したと思われる。

館内に入る。まず入り口の両側のこれ又見事な狛犬。そして門扉は菊の御紋章。即ちロシアは実効支配しているだけで、以前の物は使えるだけ使う。取り除いて自国の物と取り換える予算が無いのか。そんな事頓着しないのか。

陳列品はよく整理され、時代順に、地域、項目順に、現代まで豊富で解り易く展示されている。多分日本統治時代を踏襲したようだ。

多すぎてとても説明できないが、我々はやはり間宮林蔵時代に目がいく。最上徳内、間宮林蔵、松浦武四郎辺りが、探検家として揭示されている。特に間宮海峡付近の地図を見ると、カムチャッカや千島列島辺りは、割に正確なのに、サハリンはシベリアにくっついていたり、妙な格好になっている。確かにこの辺りだけが白地図であったことがよく解る。



(間宮林蔵他解説コーナー。右下の地図を御覧下さい。)

さてこれでサハリンの要所は概ね訪れた事になる。夜

は祝杯。満足満足。

9月17日(水)今日は日本に帰る日。朝オルガとエリックが迎えに来る。コルサコフ港まで最後のドライブ。港では出国手続き、荷物検査、預け。犬が出てきてギョ!とする。トランクの中の魚で妙なことになるか。何しろ相手



(我が祖国は緑なりき。)

はロシアだ。そこを難なく無事通過。

ここでオルガ、エリックとお別れ。サハリン滞在10日間。彼らは本当によく面倒を見てくれた。サービスと言う観念の無いロシアでは考えられない事だ。この旅の成功の大半は、彼らに負う所大なり。有難う、有難う。

又ボロバスで移動、船に乗船。昼食弁当を渡されて、行きもあったのだと気が付く。

10時30分、船は出て行く、煙は残らない。たださびれた港も旅情は残る。段々遠退くも、右にクリリオン岬がついてくる。そして5時間。

嗚呼我が祖国が見える。やはり緑だ。唯白い風力発電の風車が林立。昔引揚げ船の人達の思いをちょっぴり味わう。14時接岸。

現実には厳しい。稚内空港の出発時間との時間差がタイト。船に相談したら、何と電話でジャンボタクシーを手配してくれた。大きなトランクを抱える我々には助けの神だ。さて空港到着。品川さんと加藤さんは羽田まで予約済み。日出平さんと私はこれからシルバー割引手配。難なく席確保。私は羽田から伊丹までの分も羽田1時間待ちで予約確保。実際羽田に着いてみたら、大型のB-777機は既に満席、良かった。そして夜8時頃伊丹空港近くの上空まで飛んで来たら、「現在7機が伊丹空港着陸待ちで旋回中」との機長アナウンス。今朝発ったユジノサハリンスクは人口17.5万人、それこそ隔世の感。そして自宅到着22時。いやはや多彩で印象的な旅だった。

追記 帰って10日ぐらいたった時、突然稚内の北都観光の米田専務より電話。「元気にお帰りですか」でびっくり。実は事前にMailで計画の概要を知らせておいたのだ。計画通り実行出来たと答えたら「それはラッキーでしたなあ。」と感に堪えないような声。続けて「私なら、この計画はとともよう引き受けません。みなさん戦中派の方ばかりだから成功したのです。今時の若者なんかともよう行きませんな」との事。サハリンに最も強い北都観光の専務からそう言われては面映し。やっぱし大変な所に行って来たんや!!早速報告書送りまっさ。